

雪深き銘溪を行く

## 越後 北ノ又川（シツカイ倉沢）～岩魚止沢

大野

【日時】2006年8月26日～28日

【メンバー】大野、佐貫

今年は、お盆に休みを取り損ない、少し時期が外れた夏休みになってしまった。8月前半は下田河内に行ったが、暑さにへばってしまったので、今回はミーハーに、越後の銘溪を目指すことにした。かつて、トマで何度も計画されてきながら、一度も行かれていない溪である。パートナーは越後クラブ代表の佐貫さん。緊張するとか、胃が痛いとか言うのはいつものこと。ルートと下山路は迷った末、雪による中途敗退の可能性、ヘソ曲がり精神その他の理由により、記録の見当たらなかったシツカイ倉沢を詰めて岩魚止沢を下るルートにした。

8月26日(土) 晴

赤柴沢に向かう石井Pとシルバーライン入り口の広場で前夜祭。朝は5時に起きて雨池橋まで自転車をデポに行き、銀山平に戻る。

石抱橋の先に車を置いて林道に入り、白沢出合いより北ノ又川の広い川原に下りる。川面に湯気が立っていて、「どういうこと？」と思うが水に浸かって納得。8月というのに信じ難い冷たさ。水量も少ないであろうという予想に反し、腿くらいの渡渉となる。今年の雪は凄いということか。佐貫さんは、早速ネオプレーンの服を着ている。ワイヤーの張られた道跡を過ぎると、淵があるが、とても泳ぐ気になれず、岩盤の上を行く。入溪から1時間程で岩魚沢出合い。

その先の小沢で沢は右に曲がり、トロとなる。入口脇の左岸の岩を登り、小さく巻こうとするが降りられず、時間を食う。結局、上の平らな所まで追いあがられ、枝沢から下降する。滝ハナ沢の先では早くも雪橋が現れ、下を潜る。豊かな水量で合流する芝沢で一思索。折角北の又に来たのだから、中を行きたいということで、巻き道には逃げず。この先はゴルジュの中に淵・小滝が連続して、楽しい。泳ぐ気になれないので、高巻くところもあるが、それ程悪くはない。小滝と淵を越えられず、右岸を巻く。小さく懸垂しようとして、また、ルート選択の失敗。今日は勘が働かない。もう5mほど進んでスラブを20mほどの懸垂で流れに降りれば問題なかったのに、ザイル操作のまずさもあって30分以上のロス。淵を小さく左岸から巻いていると、対岸にオオビラヤス沢となる。降りられなくもないが、淵が深く、上流も厳しいのでそのまま巻く。ゴルジュを更に進むと、少し沢は開け、右岸の小さな川原に幕とする。集中豪雨には耐えられないが、快適な幕場であった。



8月27日(土) 曇時々晴

4時起床。天気は曇りですっきりしない。すぐに板倉沢出合いとなり、本流の奥はな

にやら湯気が立ち、怪しげな気配。ブロックの残る小滝を越えると、また雪渓。下を潜ると、先には更に雪渓。左岸の枝沢から巻きに入る。しばらくして、一旦下降を図るも、先に雪渓が見えるために、巻き続ける。撤退の言葉も頭をよぎるが、まずは進む。高巻はそれほど難しくなく、1時間程で本流に戻った。その先すぐに左岸から枝沢が入り、本流は再度雪渓。今度は上に乗る。側壁にはウドの新芽が出ており、収穫できた。雪渓から下りると、目の前は二条10mの滝。左壁を登り、中段からは小さく巻ける。続く小滝を右から越えるとシッカイ沢。



本流は、ここから連縛帯となる。初めの滝は簡単。続く8mの滝は、左のリッジを佐貫さんが空荷で突破して荷揚げ。横のレンゼにはハーケンも打たれていた。この上も絶景で、しばし歓声。岩盤状で、どこが滝と言いつらいが、次の立派な8m滝は右を少し巻き気味に登る。しかし、この先は再度雪。左岸の枝沢から巻き気味に雪渓に乗って通過。ここから北ノ又のハイライトの筈・・・であるが、雪渓を一つ潜った先には、雪渓とその上に段々畑の岩壁が見える。右岸の草付きから雪渓に乗ると、中央部はまだ雪が30mは積もっているであろう。雪がないときに来たかったなあ・・・。



【連縛帯】

【円形劇場入口】

左岸の側壁から若干進んで下降。雪の下は側壁の発達した大きなゴルジュとなっていた。15mほど側壁の発達した廊下を腹まで浸かって通過するが、長く浸かっていると痛みを感じるほど水は冷たい。これを越すとすぐに15mの豪瀑。地図上の滝だ。左岸から巻く。



すぐに大ヒカバ沢の出会いとなる。核心部を越えた安心感にしばし休憩。ここからもゴルジュに小滝が続くが、穏やかな溪相となり、川原も時に現れる。しかし、ここにも雪渓が現れる。両岸がそれほど切り立っているわけでもなく、倒れた根曲がり竹の上に黒っぽい雪渓の端が乗る様子は、梅雨時のようである。飛び交うトンボと並べると、違和感を覚える風景である。小滝の上の雪渓を越えると、完全な川原となり、滝沢出会いへ。出合いで休憩。シッカイ倉沢の水も冷たいが、滝沢の水はそれより冷たく、痛いほどである。時間があるので、滝沢の雪渓見物に。すぐに雪渓となり、延々と続いている。

さて、いよいよシッカイ倉沢。記録がない筈だったのに、佐貫さんに、今月号の岳人に載っていると知られて大ショック。また、新潟稜友にやられてしまった。シッカイ倉沢に入ると、荒れている感じ。



至る所に折れた木が散らばり、今年の雪の凄まじさが分かる。7m 滝を登ると、先に 10m 滝が見える。兎沢は、その手前で左岸から合流している。10m 滝は左岸から巻き気味に登る。ナメ床を越えると、また荒れた感じとなり、雪も残っている。直ぐに二股。なのだが、どうみても正面の流れが太く、右岸からチョロい枝沢が滝となって落ちてきている感じ。集水面積では左又の方が広いぐらいなのに、水量比 1 : 4。これも雪溪の成せるわざか。例の岳人の記事によれば、源頭はキジ場らしいので、あまり上流の行きたくなく、左又の小滝の上、雪溪の消えた所に若干のスペースを見つけ、幕とする。薪も豊富で快適な幕場であった。本日下山した石井Pによれば、銀山平では 16 時ころ大雨だったとのことだが、この辺りは時に雨がぱらつく程度であった。

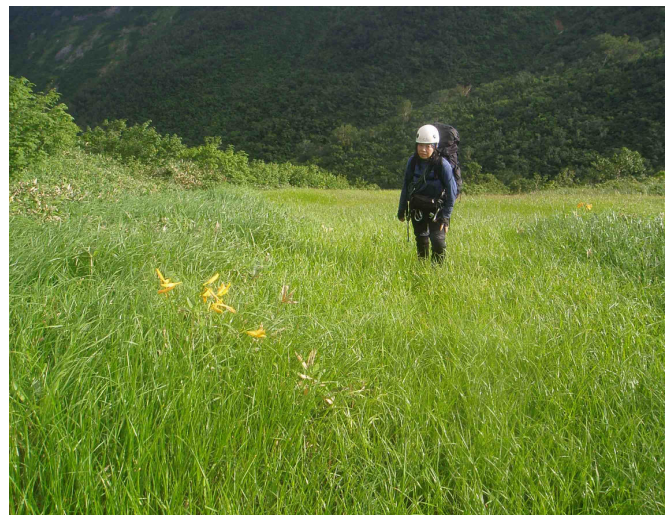
8月28日(日) 晴時々曇

しばらくは荒れた感じがするが、正面の枝沢を分けて左に曲がると連瀑となる。多段 30m の滝はいずれも快適に直登できる。その後も、登れる滝が連続して楽しい。地図の滝記号である傾斜の緩いナメ滝 30m をスタスタと歩いて登り、割合立派な三段 20m の滝も問題なく越え、その後も快適な遡行を続けると、奥の二股。鞍部へ向かう枝沢は右側から 5m の滝となって落ちている。ここは右岸から巻くと流れは細くなり、源頭は近い。岳人の記事によれば、鞍部に直接出るとキジ場ということなので、苔むした枝沢を右に入り、直ぐの二股を左に入って涸沢を登っていくと、やがて右岸側の側壁が低くなり、ひょっこりと草原に出た。ニッコウキスゲの揺れる草原を登り、稜線で握手。

稜線上は明瞭な道となっている。鞍部まで降りていくと、岩魚止沢側は草原となっているのが見える。5m のヤブこぎで草原に降り立ち、下降を続けると、すぐに水が現れる。

沢は、何もないと思っていた割には、滝も多く、楽しめた。と言っても、下降に苦勞するような滝はなく、クライムダウンか簡単に巻ける。核心は、1500m 付近から 1300m 二股まで。その先は、所々に美しいナメがあったりもするのだが、全体的に枯れ木が多く、荒れた感じがする。小さな淵で岩魚一家を見かけると、すぐに、ひょっこりと崩壊した林道の木橋跡に出た。立派な道があるつもりでいたので、ちょっとショック。廃道化の進んだ林道をしばらくで、立派な中ノ岐林道に出た。

【源頭の草原】



【地形図】 兎岳、八海山、平が岳、奥只見湖

【行程】

26日 石抱橋 (8:30) ~ 岩魚沢出合  
(9:55) ~ 滝ハナ沢出合 (11:40) ~  
大ビラヤス沢 (14:05) ~ 板倉沢手前  
C1 (14:50)

27日 C1 (5:45) ~ シツカイ沢 (8:00) ~ 大ヒカバ沢 (10:05) ~ 滝沢 (11:25) ~ C2 (13:00)

28日 C2 (5:45) ~ 稜線 (7:45) ~ 林道跡 (10:40) ~ 13:10 雨池橋

【グレード】 4 級